

〈特別寄稿〉

授業観と教師の学びを アップデートする



熊本大学大学院教育学研究科
特任教授 前田 康裕

1 授業観のアップデート

(1) 授業改善はできていますか

仕事柄、様々な学校の授業を見学することが多くあります。しかし、教師の説明によって分からせようとする授業や、一部の子どもの発言だけで展開する授業も、まだ多く行われているのではないのでしょうか。(図1)

現行学習指導要領(2017)では、「何を学ぶか」だけではなく、「どのように学ぶか」も重視しています。いわゆる「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」といわれるものです。GIGAスクール構想によって全国的に配備されたタブレット型端末も、こうした授業改善を推進するために必要な「学習の道具」として活用されるべきものなのですが、現実的には従来型の授業にタブレット型端末の使用を加えただけに留まっている授業も多く見られます。

長い間、行われてきた従来型の授業を改善することは容易なことではありません。また、高校受験のことを考えると「教科書の内容をしっかりと伝えなくては」という教師側の意識が強く働くのも理解できます。

しかし、考えなくてはならないことは、「教師が伝えれば、子どもは理解できる」というわけではないということです。

教育心理学者の秋田喜代美氏は学習科学のポイントを次のように指摘しています。※1



図1：教師による説明型の授業

指導法だけではなく学習に焦点をあてる。うまく教えれば、深い概念的理解を得るわけではない。生徒は自分の学習に積極的に参加することで初めて深く学ぶ。

「教師がいかに指導すべきか」という授業者側の視点だけではなく、「子どもはどのように学ぶのか」といった学習者側に立った授業観にアップデートすることが求められているのです。教師は、多様な個性や特性をもった子どもたちが自ら学びに向かうための環境や仕掛けを設計し、学習方略を身に付けられる授業づくりを意識する必要があるのではないのでしょうか。

(2) 知識構築活動を重視する授業へ

教師がもっている知識を子どもに伝達すれば子どもは理解できるわけではありません。例えば、鎌倉幕府の将軍と御家人の関係を教師ができるだけ丁寧に教えたとします。しかし、中には天皇と将軍の違いさえ分かっていない子どももいるかもしれません。また、歴史の知識が豊富で元寇のことまで知っている子どももいるでしょう。この二人の子どもの理解の仕方は異なります。あるいは、文字や言葉だけの説明ではイメージできない子どももいるはずです。理解するためには、子どもの知識や経験、認知の特性などが大きく影響するわけです。

つまり、学習者は教師から知識をそのまま受け取るのではなく、既有知識や経験と新しい情報を結び付けながら自分なりの意味を構成するわけです。このような考え方を「構成主義」とよびます。また、その「意味を構成する」という営み自体が、他者との対話や文化、言語、道具などによって支えられていると考えることを「社会的構成主義」とよびます。現在の授業において「子どもの主体性」や「対話や協働」を重視するのは、こうした考え方が基盤となっているのです。

秋田喜代美氏は「一人一人の学習者がテキストの内容と学習者の既有知識を積極的に関連付け理解していく知識構築活動が重要」と指摘し、次のように解説しています。※1

そのためには、読んだことを使って表現する活動、各自の理解を言語化したり図示したり、あるいは行動したりしてみるなど、可視化していくことが重要になる。自分のことばで言い換えてみることや、仲間同士で相互に説明し、分かりやすく書きなおしてみるなどが知識の活用として有効になるのである。

こうした活動を支える道具として、タブレット型端末は大きな力を発揮します。子どもたちは自分の理解を整理し、仲間と共有することで、知識を「自分のもの」にしていくことができるのです。(図2)



図2：知識構築活動

(3) 自律的な学習を促す

ここ最近では「学習の自己調整」の重要性が指摘されるようになってきました。学習者が自分で目標を決め、計画を立て、やり方を自分で工夫・修正しながら学びを進める学習のことです。こうした学習を自己調整学習とよんでいます。

心理学者の河村茂雄氏は、自己調整学習の3要素の関係性を表しています（図3）。※2

「動機づけ」とは学習に向かって行動を起こし、それを持続させる心理的な働きです。成績向上に対する報酬や受験などを外発的動機づけと呼ぶのに対して、学習そのものが面白いし楽しいと感じることを内発的動機づけと呼ぶことがあります。

「メタ認知」とは、自分の考えていることや行動していることを客観的に把握し認識することです。メタ認知が高いと、「どうすればよりよく学べるか」と考えることができるので、自律的な学びができるようになるわけです。

「学習方略」は、学習をより効果的にするための自発的な工夫だと考えると分かりやすいでしょう。自分で単語帳を作ったり、自分なりにノートにまとめたり、気分を変えるために図書館に行ったりするようなことです。こうした工夫が学習方略なのです。

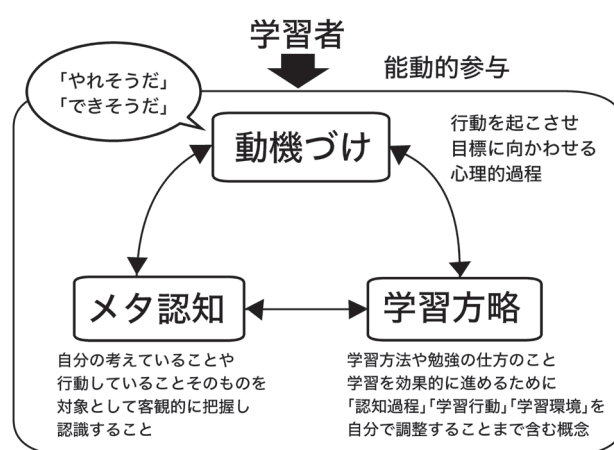


図3：自己調整学習の3つの要素

(4) 学習方略の指導

心理学者の篠ヶ谷圭太氏は学習方略を、大きく「認知的方略」と「メタ認知的方略」に分けて、以下の表のように整理しています。※3

表：学習方略

認知的方略	反復方略	単純に繰り返す	・覚えるまで何度も書く ・何回も口に出して言う ・繰り返し問題を解く
	精緻化方略	既有知識を結び付ける	・根拠（なぜ）を押さえる ・自分の言葉で言い換える ・自分の言葉でメモを取る
	体制化方略	整理する	・似た情報を集める ・対比的な情報を集める ・図や表で情報を整理する
メタ認知的方略	モニタリング	自分の学習をチェックする	・自分で自分に質問する ・どこまで理解できているかチェックする
	プランニング	計画を立てる	・勉強の計画を立てる ・勉強の目標を設定する
	コントロール	自分の学習を調整する	・重要なところに注意を向ける ・読む速さを調節する

認知的方略とは、正に「学習するための学習のやり方」のことをいいます。ここでもタブレット型端末は威力を発揮します。情報を自分の力で集めたり、理解したことを図や表にして整理したりできるからです。また、グループ内でそれを伝え合うことで理解が深まるからです。また、協働的な学びを行うことで、精緻化や体制化といった認知的方略の具体的なやり方を互いに学

び合うことができるようになります。

メタ認知的方略とは、「自分の学習を管理、調整するための方略」です。タブレット型端末で自分の英語の発音や体育の動きを撮影することで自分の学習をチェックすることができるでしょう。また、共有機能を使えば、それぞれの学習計画や振り返りを知ることも簡単に行えます。

教師が学習方法を教えること自体は大切ですが、それを一つの形に固定してしまうと、子どもたちは自分に合った方法を見つけるというメタ認知を働かせにくくなります。例えば、「教科書を何度も繰り返し読む」「ノートをきれいにまとめる」などの方法は有効ですが、全ての子どもに最適とは限りません。大切なことは、「どうすれば自分は興味をもって楽しく学べるか」ということを子どもたち自身が考え、試行錯誤しながら工夫ができるようにすることです。

学力向上において高い成果をあげている学校では、家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えているという調査報告もあります（図4）。※4

子どもたちが学習方略を身に付けることができれば、授業以外の時間も学習ができるようになります。つまり、家庭での自主的な学習にもつながっていくわけです。



図4：学習方略は子どもによって異なる

2 教師の学びのアップデート

(1) 一般的な校内研修の問題点

一般的な校内研修は、年度当初に研究主任が立案した研究テーマに従って数名の教師が研究授業を行い、年度終わりに研究論文などの形でまとめるということが多いでしょう。しかし、こうしたやり方が一人一人の教員の授業改善に有効に機能しているかといえ、必ずしもそうではありません。なぜならば、以下の問題点があると考えられるからです。

- 学校の研究テーマが、一人一人の教師にとっての「自分事」として捉えられにくい。
- 研究授業及び授業研究会が、他の教師の授業改善につながりにくい。
- 単元をベースとした自律的な学習に関する知見が共有されにくい。
- 一人一人の教師が日常的な授業改善から得た知見が共有されにくい。

「学習者側の視点に立った授業観」にアップデートするためには、こうした従来型の校内研修のやり方を見直し、教師の学び方そのものもアップデートする必要があるのではないのでしょうか。

(2) 教師による探究的な学びの必要性

中央教育審議会（2022）は「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」において、以下のように教師による探究的な学びの必要性を提言してい

ます。※5

『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子どもたちの学びの相似形であるといえる。(中略・・・前田)

これからの時代には、日本社会に根差したウェルビーイングについて考察しつつ、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくが必要になる。

確かに、教師による探究的な学びを取り入れた校内研修が実現できれば、そのこと自体が「主体的・対話的で深い学び」となり、体感的にそのよさや方法が理解できると考えられます。

教員研修においては、一人一人の教員の課題を個別に解決していくのではなく、協働的に解決していくような組織的な取組が必要になると言えるでしょう。そのことによって、仲間である同僚と一緒に学ぶことの楽しさを味わえることも期待できるわけです。

(3) 授業改善プロジェクト

授業改善プロジェクトとは、学校の研究テーマに合わせて、一人一人の教師が個別最適な課題を立てて、1年間をかけて協働で解決していくプロジェクト型の校内研修です。「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を、ICTも活用しながら、対話と振り返り（リフレクション）を通して実現することを目的とします。

以下、その手順を具体的に説明していきます。

① 理想の状態を明らかにする

授業改善プロジェクトにおける個人課題は、個人研究とは異なります。学校の研究テーマに沿って理想と現実の隔たりを自覚し、自分の授業の問題を発見することがスタートとなります。

そのためには、理想の状態を共有しておく必要があります。例えば学校の研究テーマが「主体的に学ぶ子どもの育成」といった場合、その理想の姿を教師同士の対話によって明らかにします。「振り返りに『次はこうしたい』

と書ける子ども」「インターネットから学習に役立つ情報を集めることができる子ども」「宿題がなくても自分で家庭学習ができる子ども」といった具体的な言葉にしていくわけです(図5)。



図5：理想の状態を明らかにする

② 自分の授業の問題を発見する

そして、その「ありたい姿」と自分の授業の隔たりを自覚することが必要になります。できれば自分の授業を撮影した動画を見せ合いながら対話することが理想的です。「タブレットが学

習の道具になっていない」「一部の子どもの発言だけで進められている」といった「自分の授業の問題」を発見することで改善すべき点を明らかにしていくわけです。特に「ICTを活用した授業」に関しては、イメージできない教師もいるので、理想とする授業動画などを視聴することも必要になるでしょう（図6）。

③ 一人一人が課題を立てる

自分の授業の問題点を発見したら個々の課題を立てます。例えば、「タブレットの活用をどう充実させるか」「対話的な学びをどう取り入れるか」といったものです。

授業の改善ポイントは本当は複数あるはずなのですが、1人が1つの課題に絞ることが望ましいのです。なぜならば、手を広げすぎると成果が見えにくくなるからです。「今年度の自分自身の授業改善の課題は〇〇だ」というふうに焦点化することで、時間とエネルギーを集中させることができるわけです（図7）。

④ 見通しを共有する

教員1人が1つの課題を設定したら、その課題解決のための具体的な取組（見通し）をチームで考えてプレゼンテーションを行い、教員全体で共有します。

チームの分け方は、校種や学校の規模によって異なります。教科ごとに編成したり、課題ごとに編成したりします。ある中学校では、「ICT活用を課題とするチーム」「振り返りを課題とするチーム」などの課題ごとのチームに分かれて取り組んでいます。教科を超えて対話を行えることが大きなメリットと言えましょう（図8）。

⑤ 日常的に課題解決を行う

一人一人が立てた課題については、年間を通して取り組んでいきます。例えば、「対話的な学びの充実」を課題にした教師は、それを解決するために日常の授業改善に取り組んでいくわけです。まずその教師は、同僚の先生から教えてもらった「3人グループで話し合う活動を取り



図6：自分の授業の問題を発見する



図7：一人一人が課題を立てる



図8：見通しを共有する

入れる」という「見通し」を立てます。これが「Anticipation」と呼ばれるものです。そしてすぐに「行動」に移します。これが「Action」です。しかし、やってみると、「タブレットが効果的だった」といった良かった点も発見できる一方で、「学習課題が易しすぎた」といった新たな問題にも気付くはずです。これが「Reflection」とよばれる「振り返り」です。そして、その新たな問題に対しては、「対話を活性化させるための学習課題とはどのようなものか」といった、新たな課題と見通しを立てて行動していくわけです（図9）。

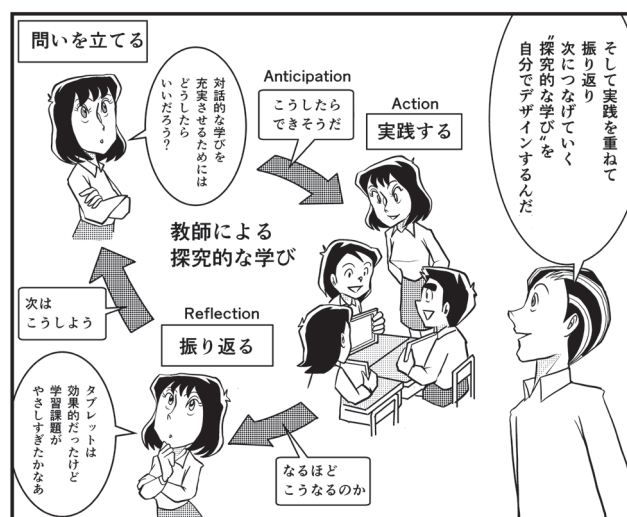


図9：教師による探究的な学び（AARモデル）

このサイクルをAARモデルとよび、主体的に行動して変化を起こす力を身に付けることができるようになるわけです。優れた教師は無意識にこのサイクルを回しているはずです。※6

⑥ 対話と振り返りを促す授業研究会

授業研究会では、公開された授業を評価するだけではなく、そこから得られた知見を対話によって「概念化」して、自分の授業改善に生かすようにしていきます。授業改善プロジェクトでは「対話と振り返りを促す授業研究会」と呼んでいます（図10）。

授業研究会の前半では情報端末を使って、良かった点や改善点・疑問点を一気に集約します。良かった点は読めば

分かりますので、内容的な議論は割愛します。そして、改善点や疑問点を中心にして対話を行い、代案を練り上げていきます。考えられた代案は口頭で発表したり、情報端末で共有したりします。

後半は、対話をしながら授業のポイントを描象化して言葉にしていきます。例えば、「相互評価が重要だ」「アイデアの可視化が効果的だ」といった具合です。このことを「概念化」と呼んでいます。そして、概念化された言葉を基にして、参加者は「自分の授業は、それができているだろうか」と振り返るわけです。つまり、他者の授業から自分の授業改善の知見が得られるようにするわけです（図11）。

従来の授業研究会

- 1、授業者の自評
 - 2、質疑応答
 - 3、意見交換（挙手指名型）（ワークショップ型）
 - 4、助言
- 問題点
研究授業のみの議論になって参加者の授業改善につながらない助言者に依存していないか？

対話と振り返りを促す授業研究会

- 前半
- 1、授業者の自評
 - 2、情報端末で一斉に記入（良かった点と改善点・疑問点）
 - 3、対話による改善のアイデア
- 後半
- 4、対話によるポイントの概念化
 - 5、対話による自分の授業の改善点
 - 6、全体の振り返り（学んだこと）

図10：対話と振り返りを促す授業研究会

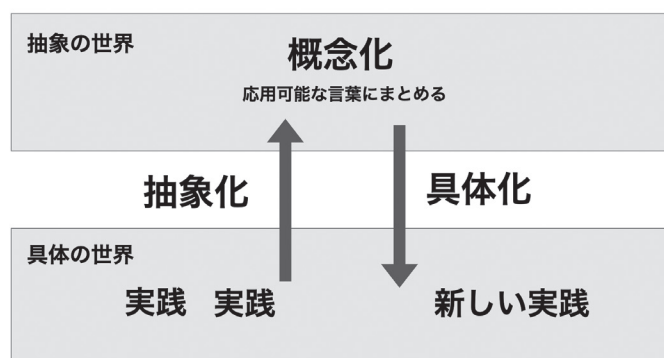


図11：概念化

⑦ 実践報告会と振り返り

3学期には、実践報告会を開催して、それぞれの取組を共有します。自分の授業改善について一人一人が発表するところにポイントがあります。報告会の方法は様々ですが、1人が3分程度で、スライドを使って発表することが多いようです。ただし、発表に対するフィードバックが重要です。グループ内では、1人の報告の後に意見を交換する時間を設けます。人数が多いところは、グループ内で発表を行い、グループ代表が全体で発表するという方法もよいでしょう（図12）。



図12：実践報告会

重要なことは、成功事例の発表会ではないということです。失敗や試行錯誤なども共有することで、課題への取り組み方を学ぶことができるわけです。実践報告会の後は、対話によって「自分の成長」を明らかにして一年を通した振り返りを行います。振り返りの目的は、経験から学ぶことであり、それを未来に生かすことだからです。

(4) 良質な相互作用が活発な学習集団を作る

教師による協働的で探究的な学びを成立させるために重要なことは、仲間への敬意と感謝です。一緒に学んだ仲間への感謝を言葉にすることで、お互いの自己効力感を高め、教師一人一人がもつ可能性を伸ばしていくことにつながっていきます。「自分は集団の役に立っている」「仲間がいるから学び合える」という感覚が結果的に自律的な学習に向かっていくからです。つまり、良質な相互作用が活発な学習集団を作っていくことになるのです。

【引用・参考文献】

- ※1：秋田喜代美著『学びの心理学 授業をデザインする』（左右社）
- ※2：河村茂雄著『アクティブラーナーを育てる自律教育カウンセリング』（図書文化社）
- ※3：篠ヶ谷圭太著『予習の科学 「深い理解」につなげる家庭学習』（図書文化社）
- ※4：耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編著『学力格差への処方箋』（勁草書房）
- ※5：中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）』（2022）
- ※6：OECD『THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS Education 2030』

【本文中の漫画の引用元】

- 図1、図2、図4：前田康裕著『まんがで知る学習方略』（さくら社）
- 図3：前田康裕著『まんがで知るデジタルの学び2』（さくら社）
- 図5、図6、図7、図8、図9、図10、図11、図12：前田康裕著『まんがで知るデジタルの学び3』（さくら社）